

第1章 歴史的風致の背景

1 自然環境

(1) 位置及び気候

千曲市は長野県の北部に位置し、長野市・坂城町等さかきまちに接し、千曲川の両岸に広がる平地と、その背後に連なる山地からなり、市域は東西 15km、南北 12km に広がり、総面積は 119.79km² となっている。

平成 15 年 (2003) に旧更埴市こうしょくし・戸倉町とぐらまち・上山田町かみやまだまちが合併し発足した、千曲川中流域の地方都市である。

気候は内陸性の気候で、平地部の年平均気温は 12~13℃ と比較的冷涼である。また、日照時間が長く晴天率も高く、四季の変化がはっきりしており、農業に良い影響を与えている。一方、降水量は年間 800 mm 程と少なく、そのため農業用のため池が各地に存在している。



図 2-1 千曲市の位置図

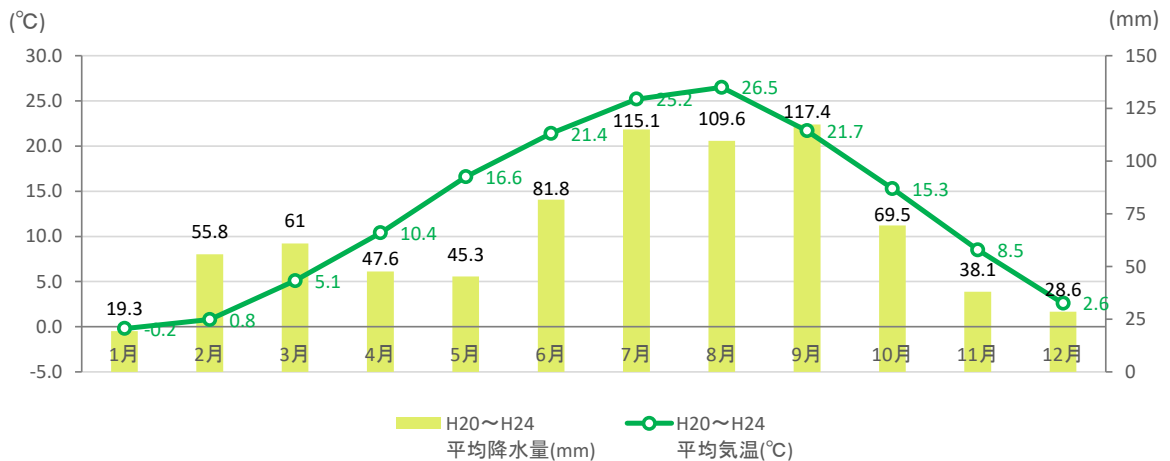


図 2-2 月別気温と降水量 [『千曲市統計書 2014 年版』]

(2) 地形

①地形の概要

千曲市は長野盆地（善光寺平）と上田盆地の間に位置し、中央部を北流する千曲川の両岸に広がる沖積地と、その東西の山麓に形成された扇状地、その背後の峰を連ねる山地で形成されている。西は三峰山（1,311m）・冠着山（1,252m）、東は鏡台山（1,269m）、南西の大林山（1,333m）をはじめとする山々に挟まれている。このため、標高の最高地点は大林山の1,333m、最低地点は千曲川の353mと高低差のある特徴的な地形となっている。

千曲川右岸の東部山地は急峻で標高が高く、左岸の西部山地は三峰山の姨捨土石流堆積物に覆われていることから比較的緩い傾斜面となっている。

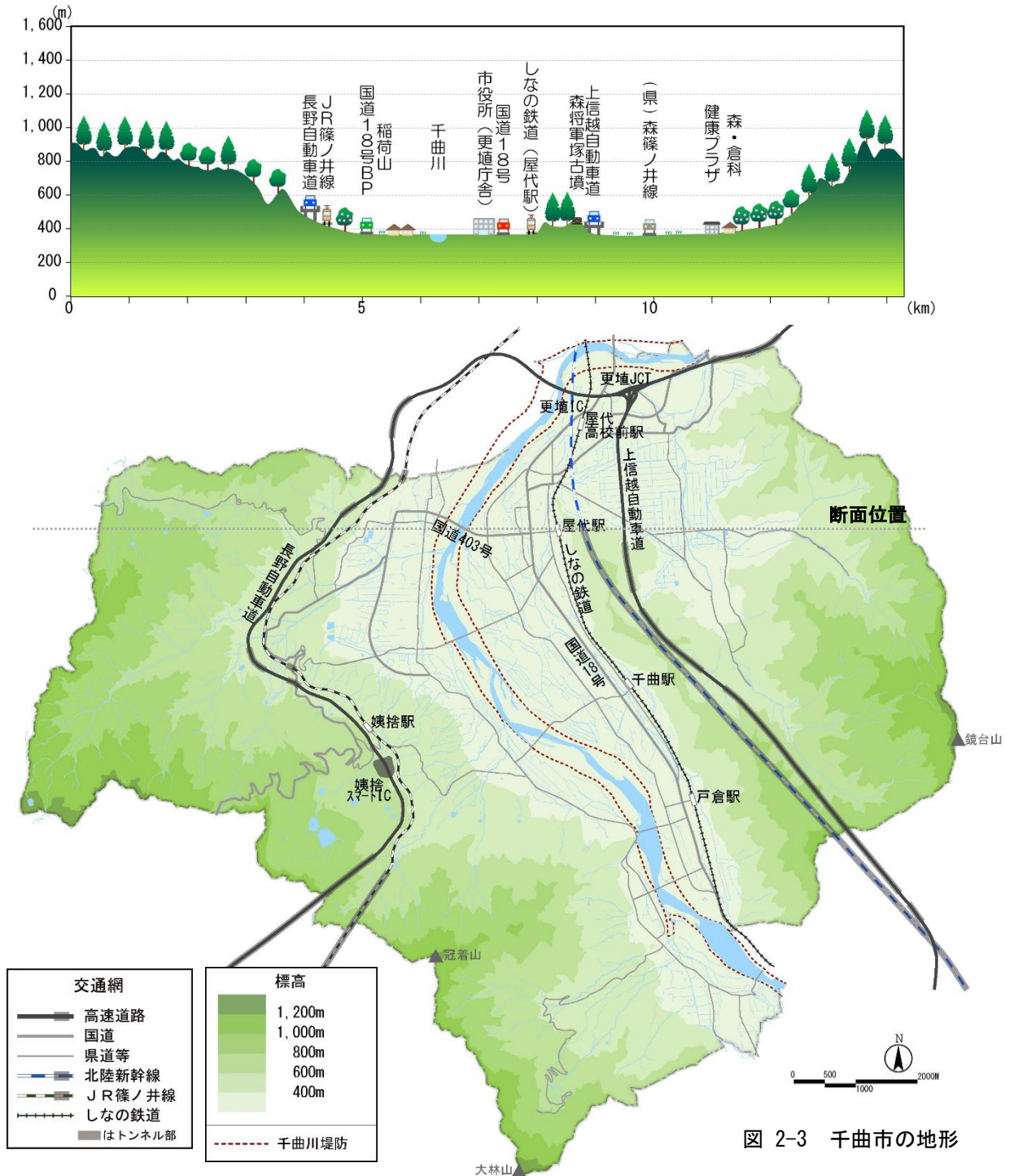


図 2-3 千曲市の地形

②千曲川

千曲川は信濃川水系の一部とされ、埼玉県・山梨県・長野県の県境に位置する甲武信ヶ岳こぶしがたけの長野県側斜面（南佐久郡川上村）を源流とし、新潟県境の栄村までの214kmをいい、新潟県域では「信濃川」と呼称され日本海まで流れる全長367kmの、日本で一番長い川である。千曲市域では、上流の坂城町境から下流の長野市境まで、約13kmを流れている。

千曲川は千曲市の市名の由来でもあり、千曲川との関わりは本市の歴史と文化には欠かすことができない。千曲川の川筋が大きく変わったとされる天文12年（1543）の大洪水にはじまり、明治8年（1875）までの約300年にわたる記録では、およそ3年に1度の割合で、千曲川が大洪水を起こしていることがわかる。

田畑や多くの人家の流出など洪水被害の記録が残されており、また洪水から家屋を守る石垣が、今も稲荷山地区や土口地区に残されている。

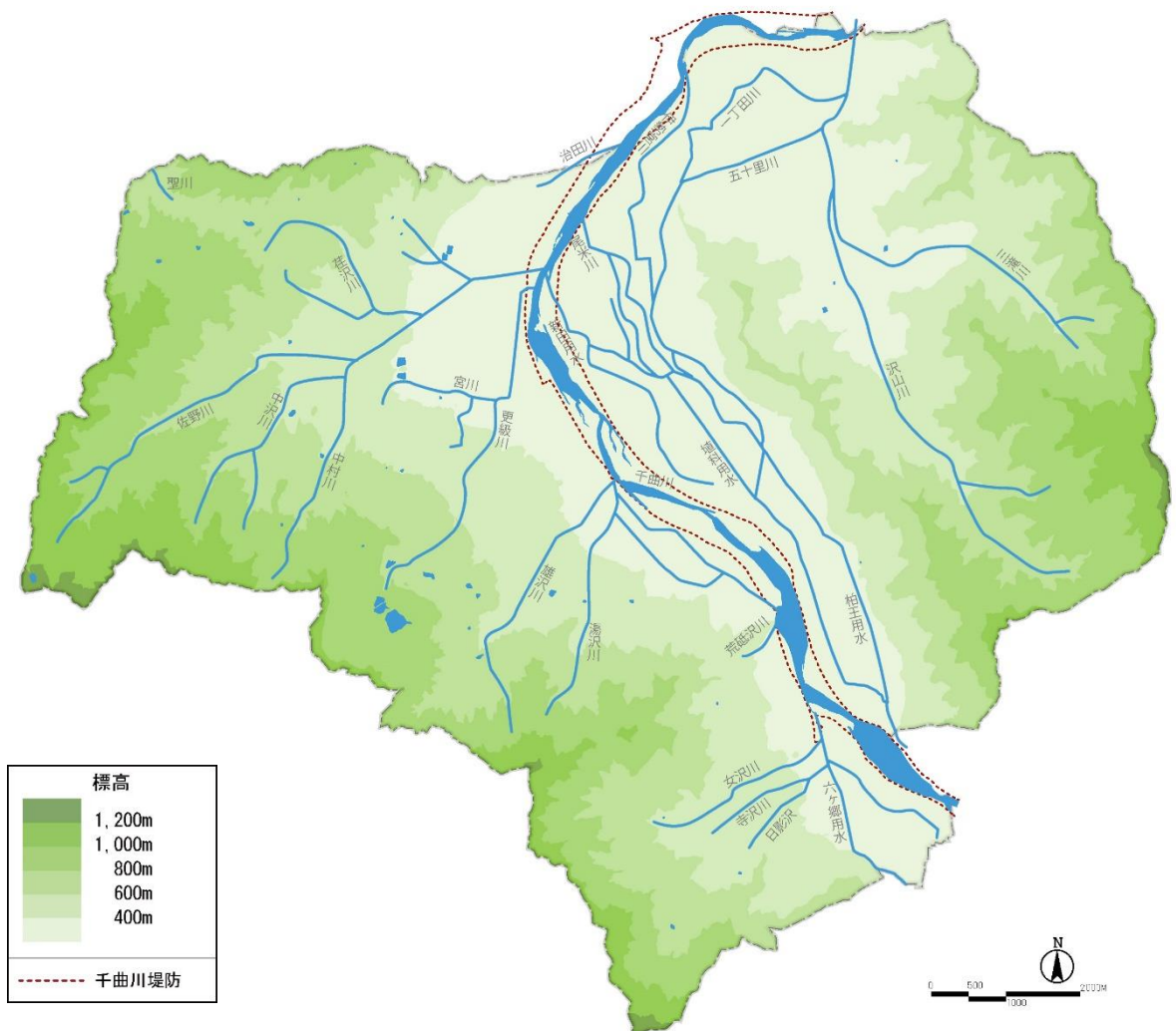


図 2-4 主要な河川

2 社会環境

(1) 千曲市の変遷

千曲市は、明治初期に存在した22町村が明治22年(1889)の市制・町村制施行により13町村に合併した。

さらに、合併・分村などを経て昭和30年(1955)に戸倉町・上山田町、昭和34年(1959)に更埴市が発足した。

平成15年(2003)には、平成の大合併により更埴市・埴科郡戸倉町・更級郡上山田町の3市町が合併し、「千曲市」が誕生した。

千曲市の名称は、市域中央を流れる千曲川に由来して名づけられた。

表 2-1 市町村合併の変遷 (略表)

明治初期	明治22年 町村制施行時	昭和の合併	平成の合併	
倉科村	倉科村	更埴市	千曲市	
屋代村	屋代町			
西船山村	杭瀬下村			
雨宮村	雨宮懸村			
土口村				
生萱村				
森村	森村			
東船山村	埴生村			
稻荷山町	稻荷山町			
桑原村	桑原村			
八幡村	八幡村			
内川村	五加村			戸倉町
黒彦村				
向八幡村				
若宮村	更級村			
羽尾村				
須坂村				
下戸倉村	戸倉村			
磯部村				
上山田村	上山田村	上山田町		
新山村				
力石村				

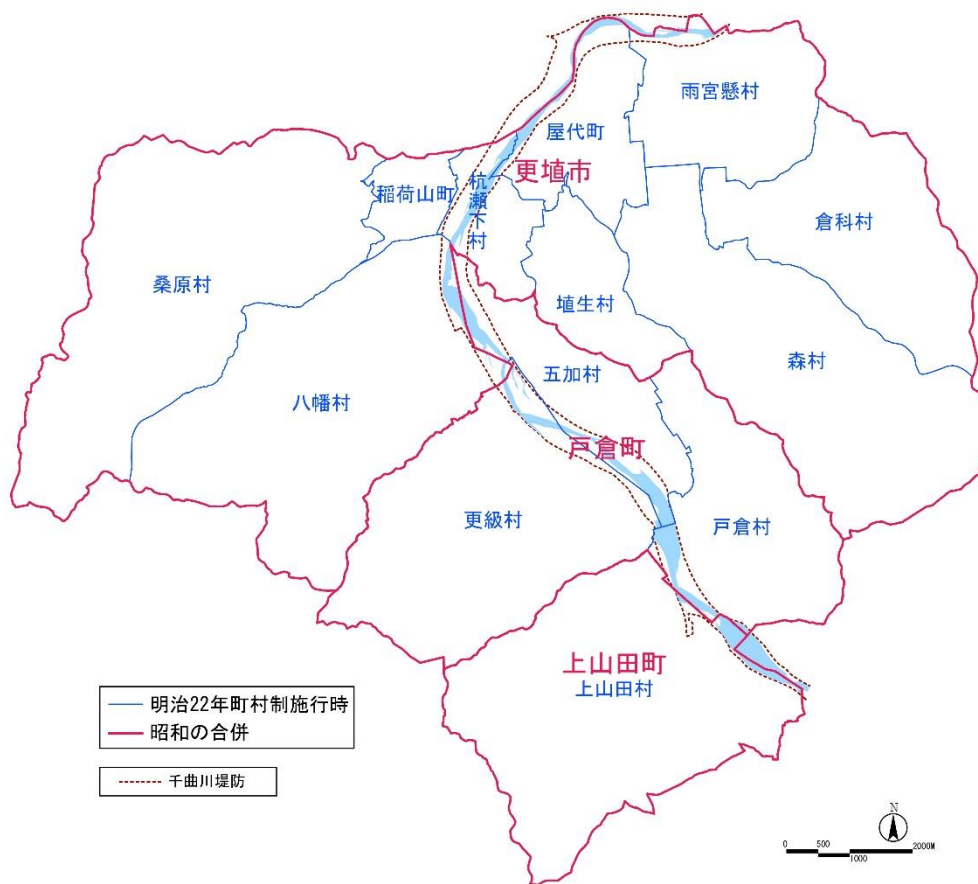


図 2-5 現在の千曲市域と市町村合併の経緯

(2) 人口

①人口の推移

人口は、昭和45年(1970)以降増加傾向にあったが、平成12年(2000)をピークに減少傾向がみられ、平成22年(2010)では62,068人となり、平成27年(2015)7月現在60,435人である。

年齢3区分人口は、平成22年(2010)時点で年少人口(0~14歳)が8,345人(13.5%)、生産年齢人口(15~64歳)が36,648人(59.1%)と、前回国勢調査時と比較すると減少傾向となっている。

一方、老年人口(65歳以上)は17,004人(27.4%)と大幅な増加傾向を示しており、少子高齢化が進んでいる。

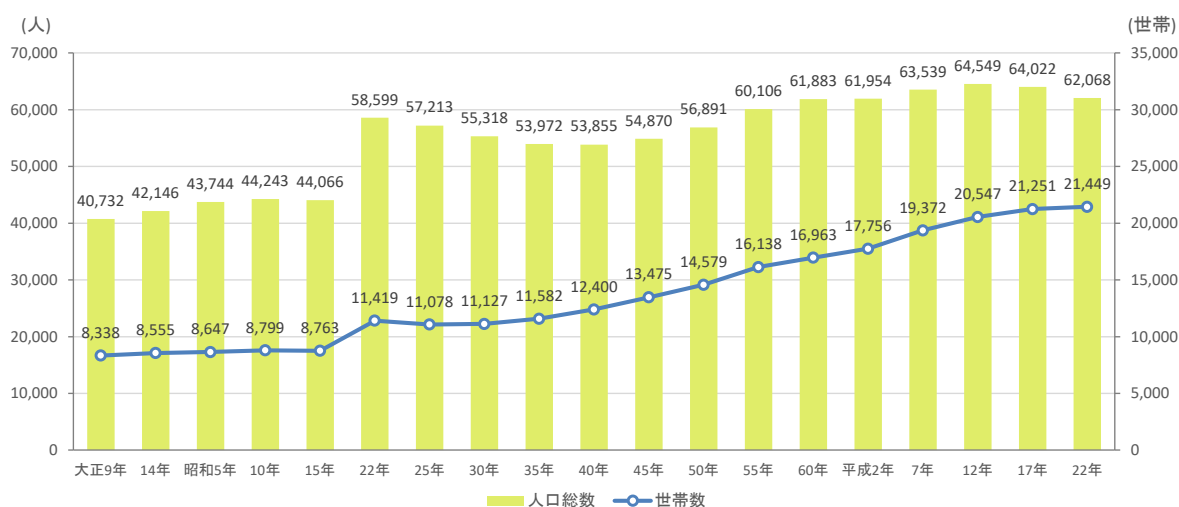


図 2-6 人口、世帯数の推移 [『国勢調査』]

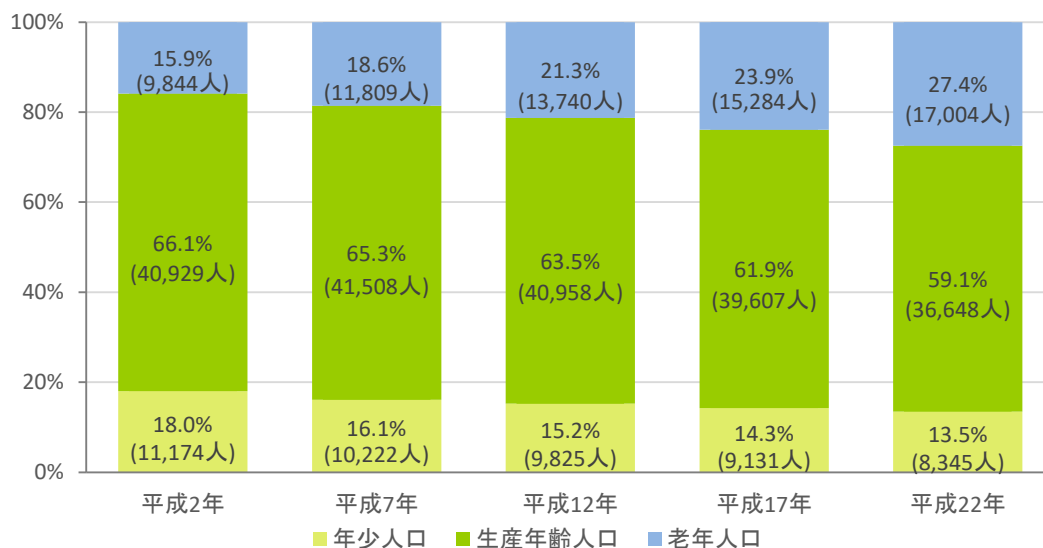


図 2-7 年齢3区分人口の推移 [『国勢調査』]

②人口分布

人口分布は、千曲川の右岸・左岸地域ともに千曲川に沿った平地部に集中している。また、右岸地域には約 39,000 人と、総人口の 2/3 が居住している。

500m四方あたりの人口が 1,000 人以上を超えている区画は 3 区画で、戸倉駅南側の 1 区画と稲荷山地区の 2 区画がある。右岸地域は、国道 18 号や大西線沿いに比較的高密度の傾向であり、左岸地域では各地区の主要地方道長野上田線沿いにまとまった居住傾向であるといえる。

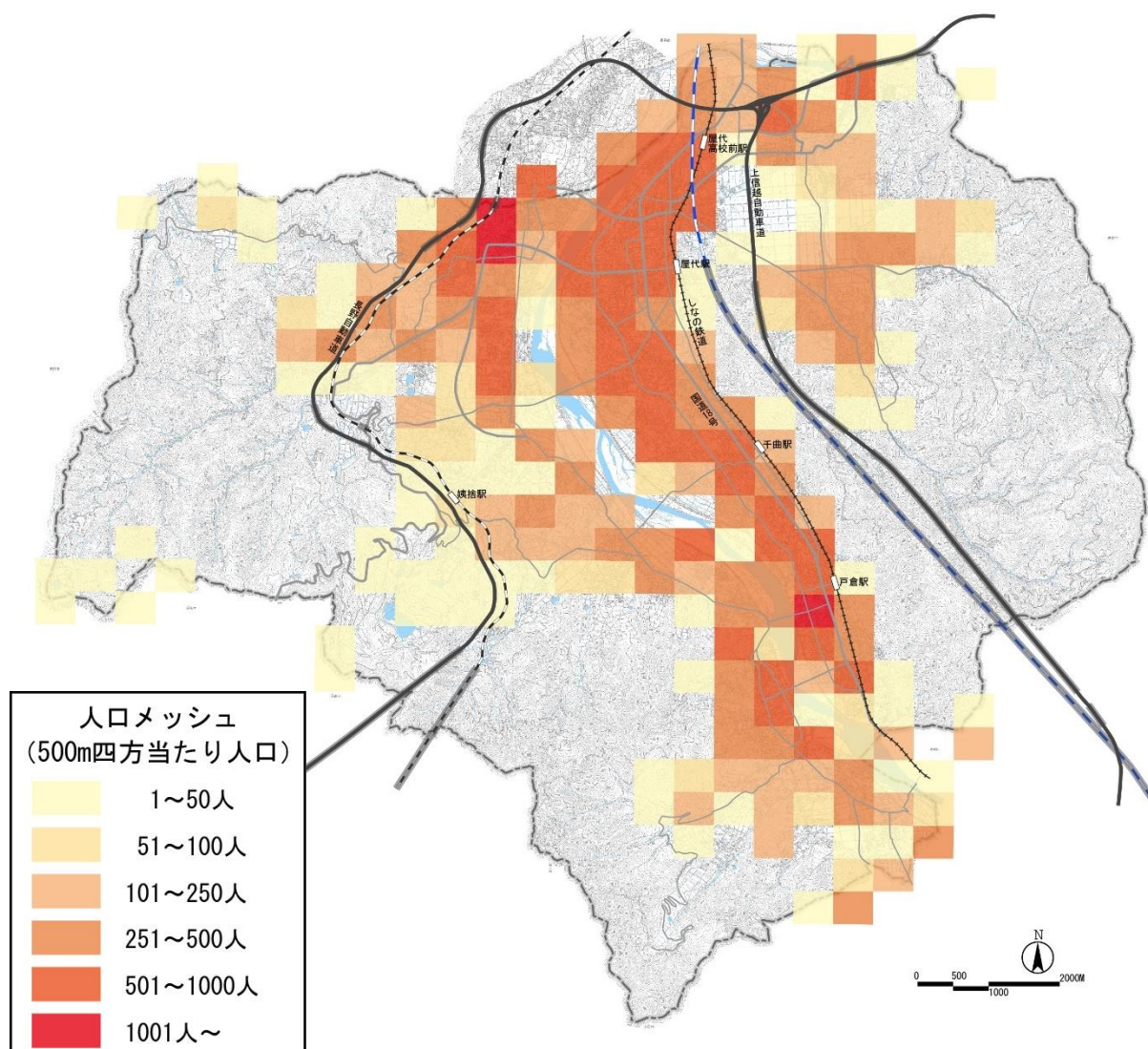


図 2-8 人口分布 [『平成 22 年国勢調査』]

(3) 土地利用

千曲市の面積は、119.79km²である。

その土地利用は、山林が37.4%を占め最も多く、次いでその他（道路・水路・公園等）が26.3%、農用地（田・畑）が18.1%、宅地が10.6%となっている。

また、市域の約49.2%（5,900ha）が都市計画区域に、約12.1%（1,452ha）が用途地域に指定されている。

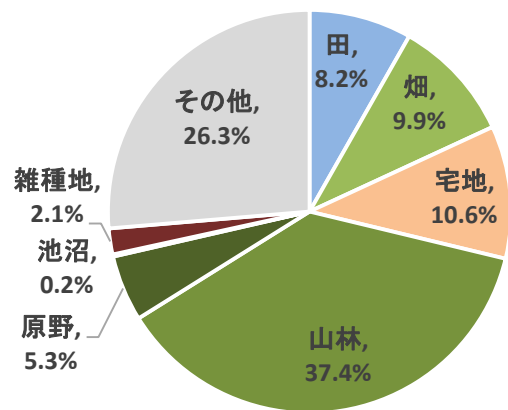


図 2-9 地目別土地面積 [『千曲市統計 2014年版』]

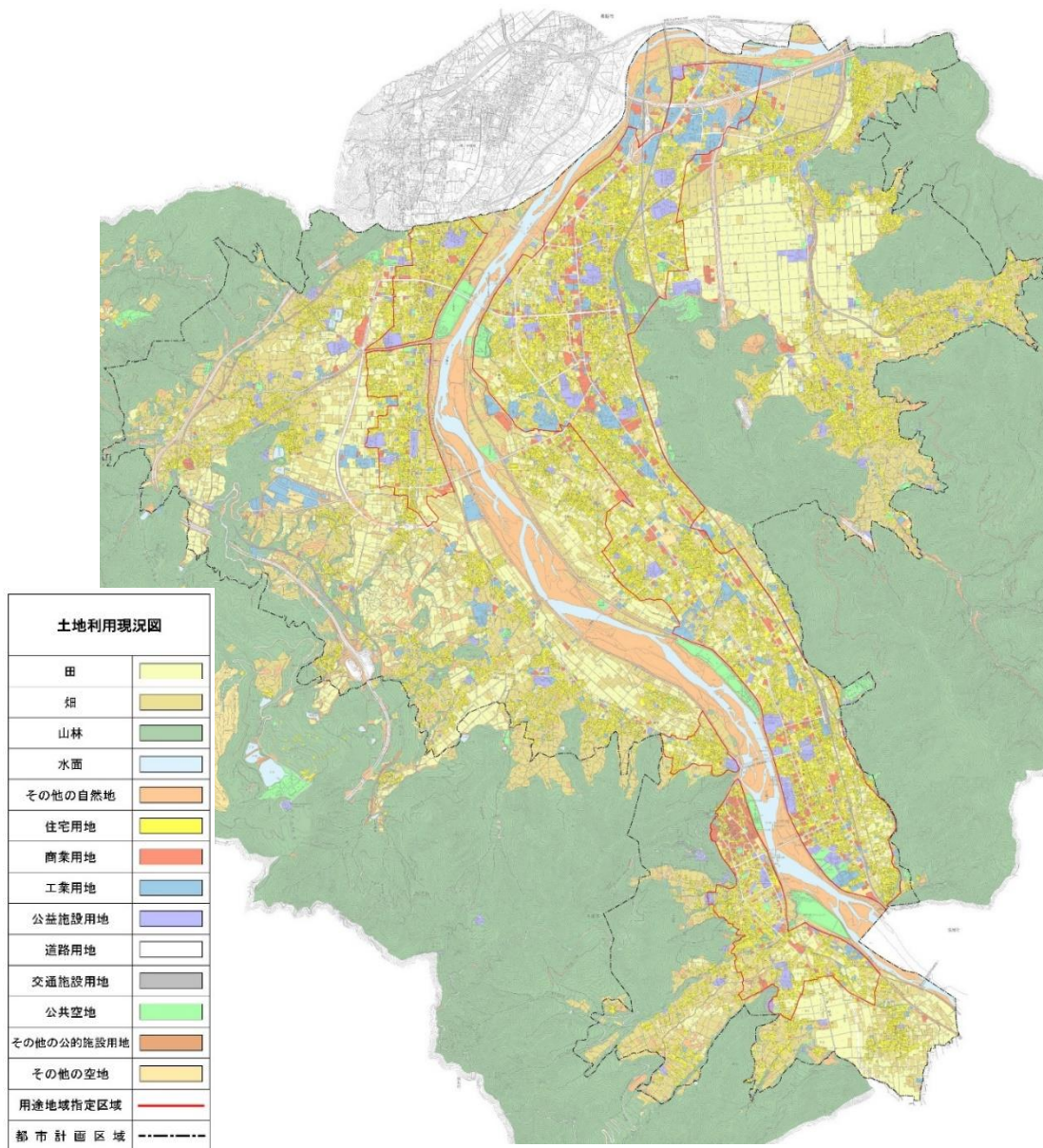


図 2-10 土地利用現況図 [『平成 22 年度 都市計画基礎調査』]

(4) 産業

就業人口は、平成7年（1995）以降減少傾向を示しており、特に、1次・2次産業の就業者が減少しており、3次産業の就業者の比率が市全体の6割を占める状況となっている。

これを産業別大分類でみると、2次産業の製造業が全体の26%と最も多く、次いで3次産業の卸売・小売業が16%と、これらで市全体の約4割を占めている。

1次産業の農業は大幅な減少傾向を示しているが、主力である水稻、りんごなどの栽培とともに、特産のあんずをはじめ果物・加工品などと温泉による地域資源の連携や、特産品化、「信州千曲ブランド」等の地域ブランドの構築など、6次産業化を推進した産業づくりを進めている。



写真 千曲市特産「あんず」

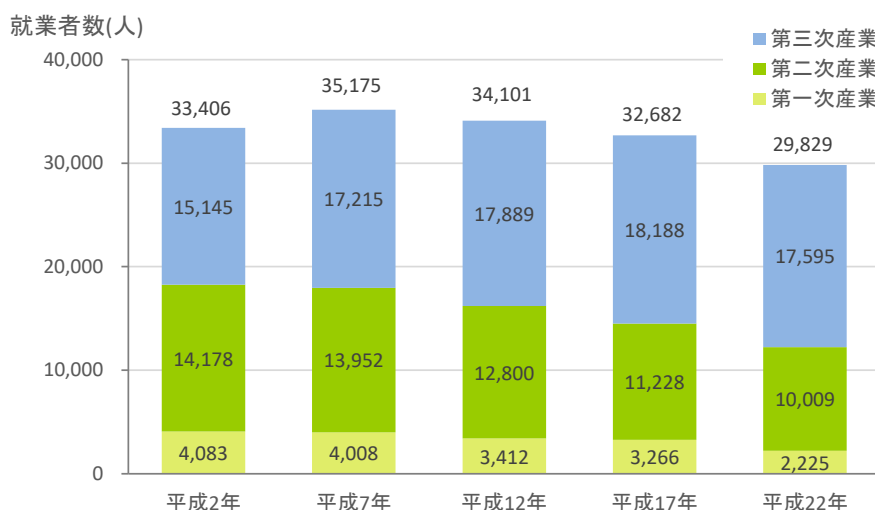


図 2-11 就業人口の推移 [『国勢調査』]

表 2-2 産業別就業人口の推移 [『国勢調査』]

区分	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	
第一次産業	農業	4,051	3,982	3,389	3,251	2,217
	林業・狩猟業	18	17	18	14	8
	漁業・水産養殖業	14	9	5	1	8
	合計	4,083	4,008	3,412	3,266	2,225
第二次産業	鉱業	18	28	30	8	8
	建設業	2,920	3,654	3,175	2,702	2,220
	製造業	11,240	10,270	9,595	8,518	7,781
	合計	14,178	13,952	12,800	11,228	10,009
第三次産業	電気・ガス・熱供給・水道業	62	71	86	66	83
	運輸・通信業	1,318	1,363	1,540	1,782	1,821
	卸売業・小売業	5,453	6,302	6,538	5,219	4,640
	金融・保険業	644	714	660	542	557
	不動産業	140	128	137	136	266
	サービス業	6,646	7,693	7,990	9,609	9,336
	公務	882	944	938	834	892
	合計	15,145	17,215	17,889	18,188	17,595
総合計	33,406	35,175	34,101	32,682	29,829	

※分類不能を除く

(5) 観光

千曲市の主な観光地は、戸倉上山田温泉をはじめとしてあんずの里、武水別神社、科野の里歴史公園、姨捨の棚田などがあり、年間40万人を超える人が訪れている。

また、4月に行われるあんず祭りや、戸倉上山田温泉夏祭り・千曲川納涼煙火大会、千曲川のつけ場やアユ釣りなど、四季折々の自然やイベントにも多くの人々が訪れている。

観光に関する市民アンケートで70%以上の市民から親戚、知人、人に勧められる観光資源として、戸倉上山田温泉、姨捨の棚田、武水別神社、森將軍塚古墳・古墳館と、おしぼりうどんが挙げられている。

首都圏、北陸新幹線沿線の県を対象にした「戸倉上山田温泉・千曲市GAP調査(平成26年)」における戸倉上山田温泉・千曲市のイメージとしては、「温泉街」、「千曲川」、「美しい自然」、「歴史がある」などのイメージが上位に位置づけられる。

利用者数(千人)

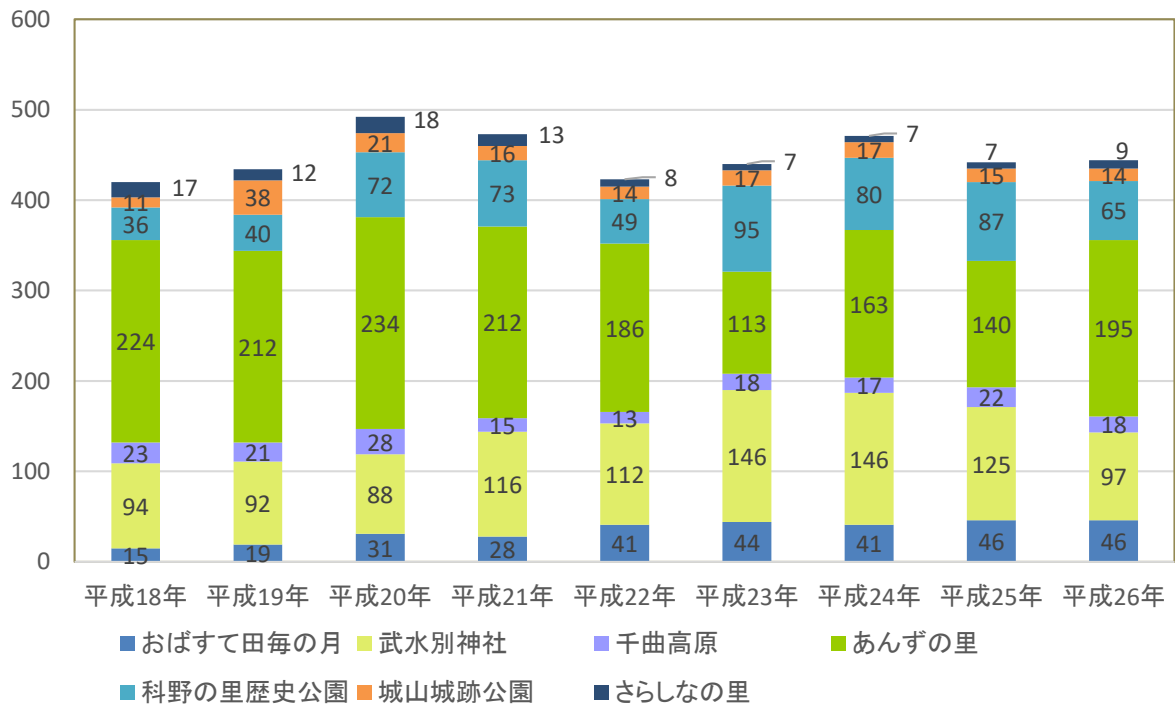


図 2-12 観光地利用者数 [『千曲市統計』]



写真 あんずの里



写真 武水別神社



写真 姨捨の棚田

(6) 交通網

千曲市は、千曲川沿いのルートや水運、古代の東山道と北陸道^{とうさんどう}を結ぶ東山道支道にはじまり、近世江戸時代には北国街道、北国西往還^{ほっこくにしおうかん}（善光寺道^{ぜんこうじみち}）、谷街道^{たにかいどう}が交わる要衝の地であった。その後、近代明治期には東西を結ぶ鉄道の篠ノ井線・信越本線が相次いで開通した。現在も、高速交通網として長野自動車道と上信越自動車道が合流する更埴ジャンクションがあり、北陸新幹線が通過している。市内には更埴インターチェンジと、姨捨スマートインターチェンジの2つのインターチェンジがある。

また、一般道路は、北国街道・北国西往還・谷街道などを原型とした国道18号・国道403号が、現在も幹線的機能を有している。さらに、国道バイパス八幡－稲荷山間、坂城－上山田間が一部供用されている。

公共交通網は、しなの鉄道4駅とJR篠ノ井線の1駅が存在する。また、平成24年（2012）3月に廃線となった長野電鉄屋代線の代替として運行するバス路線と、市が運営する循環バス8路線、東部地区のデマンド型乗合タクシーが市民の足となっている。



図 2-13 歴史的な街道

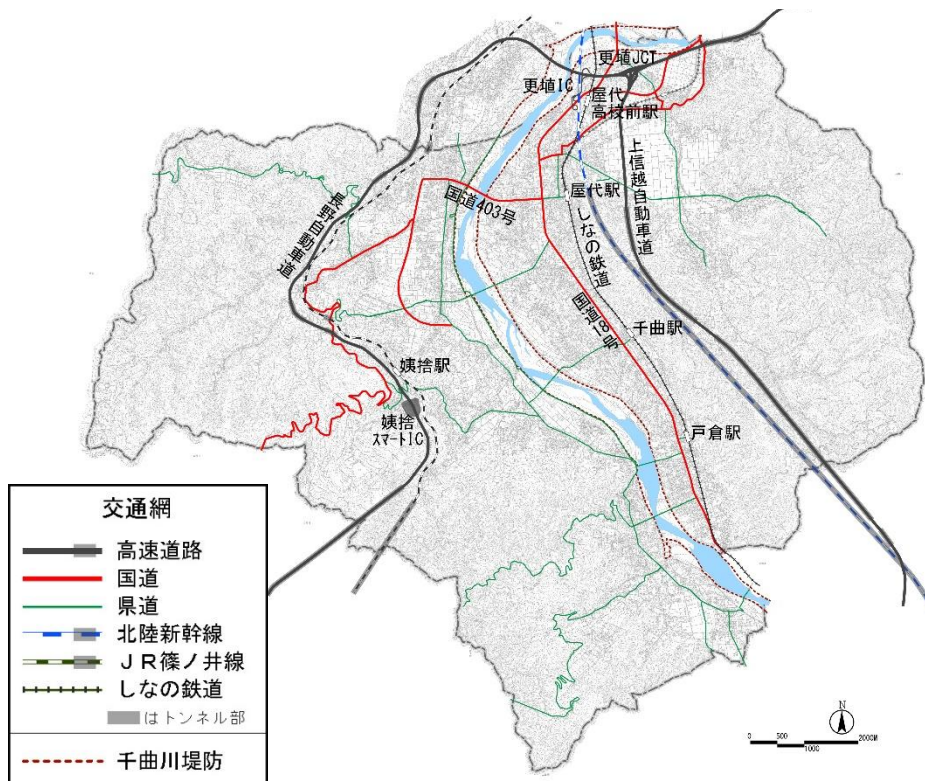


図 2-14 市内の交通網（公共交通、道路網）

3 歴史的環境

(1) 原始—千曲川の恵み—

①旧石器時代

千曲市における最初の人びとの足跡は、旧石器人（1万数千年前）の生活痕跡としての遺跡が、千曲川の兩岸の山間部大田原地区（左岸）^{おおたわら}佐野山遺跡、森地区（右岸）^{さのやま}沢山遺跡^{さわやま}で確認されている。

その後、生活の場は徐々に平地の沖積地に近づき、^{もりあがたやま}森 県山遺跡（森地区）、中村遺跡（^{さらしな}更級地区）、^{あらやまやまのかみ}新山山ノ神遺跡（上山田地区）などが、台地や扇状地先端の崖^{がいすい}錐上に見つかっている。

本市の旧石器時代は、和田峠^{なわまち}（長和町・下諏訪町）産などの黒耀石を石器素材とした東日本に広く分布する石器群であることから、当時から千曲川沿いのルートなど広く交流があったことが推定される。

②縄文時代

縄文時代には、住居を造って定住するようになり、千曲川の自然堤防上や扇状地先端部など千曲川沿いの平地部に集落遺跡が展開する。縄文時代の遺跡としては、千曲川右岸の屋代地区の地表下4mに発見された縄文時代中期の大集落^{やしる}の屋代遺跡群をはじめ、^{ひのおどぐち}日ノ尾・土口遺跡（土口地区）がある。左岸では池尻遺跡（大田原地区）、^{おおいけみなみ}大池南遺跡（八幡地区）、^{みしま}三島・^{はばた}幅田遺跡（更級地区）、^{あらや}新屋遺跡（上山田地区）がある。このうち縄文時代早期の池尻・大池南遺跡などは山地に位置しており、前期～後期の屋代遺跡群は沖積地、後期の日ノ尾・土口遺跡は自然堤防上、中期～後晩期の三島・幅田遺跡は^{おざわがわ}雄沢川、後期の^{めざわがわ}新屋遺跡は女沢川によって堆積された扇状地上に位置している。



写真 地表下4mの縄文時代の集落（屋代遺跡群）
[長野県埋蔵文化財センター]

千曲川の沖積地に生活の場が展開されるようになった背景には、千曲川の豊かな漁獵があったものと考えられる。屋代遺跡群の住居跡からは、サケの魚骨が見つかり、当時の千曲川に関わる生活の様子を知ることができる。

③弥生時代

千曲川流域の善光寺平（長野盆地）において、稲作農耕を受け入れたのは、自然堤防上に営まれた集落遺跡である^{しののい}篠ノ井遺跡群（長野市）や、屋代遺跡群の人びとであった。ともに自然堤防上に居住し、その後背湿地において稲作を行った。屋代地区に展開する屋代田んぼの地下からは、当時の小区画水田跡が見ついている。

当地方の弥生時代後期を代表する文化として、箱清水遺跡（長野市）から出土した土器を標式とした箱清水文化がある。これは、千曲川水系に広がる単なる土器文化分布圏を超えて、いわば文化圏、「クニ」と呼べる地域集団であった。

④古墳時代

弥生時代から古墳時代にかけては、国家形成期であり、近畿地方の有力者と関係を深めた各地の有力者の墓（前方後円墳）が築かれ、統一国家へと歩いていく様子を市内の古墳からもみてとれる。特に、弥生時代の周溝墓しゅうこうぼや礫床墓れきしょうぼなどの集団墓から、古墳時代には山上に隔絶した規模の古墳が築かれるようになる。

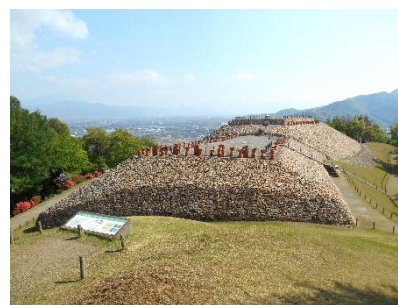


写真 森将軍塚古墳

4世紀代に築かれた県下最大の前方後円墳である森将軍塚古墳（屋代地区）を最初に、4世紀後半に造られた有明山将軍塚古墳ありあけやま、5世紀前半の倉科将軍塚古墳くらしな、土口将軍塚古墳（ともに埴科古墳群、国指定史跡）が次々に築かれている。5世紀後半以降になると、善光寺平での前方後円墳の築造は姿を消し、代わって伊那谷の飯田市周辺に前方後円墳が築かれるようになる。市内では、塚穴古墳（稲荷山地区）、北山古墳（生萱地区）しらつか、白塚古墳（森地区）などの横穴式石室を設けた6～7世紀代の小円墳が築かれた後、しだいに古墳は築かれなくなり古墳時代は終焉する。

（2） 古代—信濃国の中心—

奈良時代の和銅6年（713）に、好字二字令により「科野国」が「信濃国」と表記されるようになったが、その後も「科野」も使われることもあった。

本市域は、当時10郡から構成される信濃国の中で「シナ」地名をもつ「更級郡」さらしなぐん「埴科郡」はにしなぐんにまたがっており、人口が最も多く中心的な役割を果たす地であったと考えられている。

屋代遺跡群の発掘調査において、多量の木簡群もつかんが発見された。その中に「符更科郡司等可口」と記された国符木簡こくふがあることから、屋代地区に初期国衙（役所）関連施設の存在が推察されている。

また、『三代実録』の貞観8年（866）2月2日条には、「信濃国埴科郡屋代寺」が定額寺（準官寺）に格上げされたことが記され、雨宮地区にある雨宮廃寺であると考えられている。

こうした役所や寺など、当時の主要な施設が設けられた背景には、千曲川の水運や東山道支道（信濃国と越後国を結ぶ道）が通っていたと推定され、古代から交通の要衝であったことがうかがわれる。

当時の人々の生活については、平安時代後期の『日本紀略』に「仁和4年（888）、信濃国大水ありて山崩れ河溢れる」と記載される地震（仁和3年<887>8月）を伴った大きな被害があったことが記録されている。この大洪水は、仁和3年（887）の地震で八ヶ岳の天狗岳の山体崩壊により千曲川がせき止められ、翌年6月に決壊したもので、屋代地区では厚いところで3mもの洪水砂が堆積している。



写真 屋代遺跡群出土木簡
[長野県立歴史館]

(3) 中世—村上氏・屋代氏等領主の台頭—

① 荘園の発達と村上氏

平安時代以降、当地域には御厨・荘園や公領があった。市内では、^{くじょうじょうこうじりょう}九条城興寺領として倉科庄（倉科地区）・^{かのうやしろ}加納屋代四箇村（屋代地区）、^{いwashimizuhamanguriyō}石清水八幡宮領として^{おたにしょう}小谷庄（八幡地区）、^{むらかみみくりや}伊勢神宮領として村上御厨（坂城町・上山田地区）などの荘園のほか、^{こくがりょう ふなやまごう はにゅう ごか}国衙領の船山郷（埴生地区・五加地区）である。この地域の開発が活発になされ、中央政権とのつながりが密接であったことを物語っている。

この頃、^{みなもともしよ}源盛清が都から村上郷に配流され、その子^{ためくに}為国は「村上氏」を称した。村上氏の支族には、屋代氏・山田氏らがあり、村上氏とともに鎌倉幕府の御家人となった。

室町時代には、船山郷に船山守護所が置かれ、室町幕府方と旧鎌倉幕府方の合戦が度々おこなわれたことが『市河文書』（山形県本間美術館蔵）に記されている。南北朝の動乱の中、後醍醐天皇の皇子^{むねなが}宗良親王（南朝方）が、更級郡^{かむりきやま}姨捨山（冠着山）^{さらしな}近くの更級の里に、一時居を構えたことが伝えられ、更級地区には、「築地御所」と呼ばれるところがある。

応永7年（1400）に起こった守護との対立「^{おおとうかつてん}大塔合戦」では、村上氏を総大将とする国人勢が勝利し、村上氏は支配域を拡大した。

② 戦国時代の争いと屋代氏

戦国時代には、信濃への甲斐の^{ただしんげん}武田信玄の侵攻に対し、村上氏などが救援を求めた越後の^{うえずぎけんしん}上杉謙信との5回にわたる戦い「川中島の合戦」が起こった。こうした中、在地の屋代氏は武田氏に味方し、所領の継承を^{あらとじょう}図った。山城の屋代城（屋代地区）や荒砥城（上山田地区）が築かれたのはこの頃である。武田氏が^{おだのぶなが}織田信長に滅ぼされ、また織田信長が本能寺で自害すると、屋代氏は北信濃を支配した上杉氏に組み入り更級・埴科両郡にまたがる領主となり所領を保持した。^{うえずぎかげかつ いなりやまじょう}上杉景勝が、稲荷山城（稲荷山地区）を築いたのはこの頃である。その後、屋代氏は上杉氏から徳川方に離反し、この地を去り、徳川家の家臣となって近世大名へと成長していった。

戦国時代においては、在地の領主は臣従する領主を替え、所領や一族を守った姿を屋代氏の動向から読み取れるものである。



写真 屋代城跡 ▽印



写真 再現された荒砥城

(4) 近世—松代藩領・幕府領・上田藩領に分轄—

①分轄統治

慶長5年(1600)の関ヶ原合戦の後、徳川家康が江戸に幕府を開いた江戸時代になると、千曲市域のほとんどの地区(更級地区・上山田地区も含めて)は真田氏が治める松代藩領となった。しかし、稲荷山地区は仙石氏(後に松平氏)が治める上田藩領内の川中島飛領に分かれた。北国街道沿いの松代藩と上田藩の接する交通の要衝である埴科郡の一部の小島から以南の埴生地区・戸倉地区は、幕府領として治められるという複雑な様相となった。

②宿駅制と交通

千曲市域では、前の戦国時代を通して甲斐や越後への往来のために、街道や宿ができていたとみられる。江戸時代になり宿駅制度は、東海道から中山道へと順次整えられた。千曲市を通過していた主な街道は、北国街道、北国西往還(善光寺街道)、谷街道(松代道)である。

北国街道は、中山道と北陸道を結ぶ街道で「北国往還」とも呼ばれ、五街道に次ぐ重要な街道に位置付けられていた。中山道の信濃追分宿(軽井沢町)から分かれ、信越国境を越え高田(新潟県上越市)で北陸道に接続し、出雲崎宿まで続く街道で佐渡の金銀を江戸に運ぶ輸送路としての役割があった。

北国西往還は、中山道の洗馬宿(塩尻市)で分かれ、篠ノ井追分宿で北国街道に接続し、善光寺までの街道である。

谷街道は、矢代宿(江戸時代には、「屋代」を「矢代」と表記)から松代を通り、越後国十日町に至る。

これらの街道は、参勤交代、善光寺や戸隠神社、伊勢神宮への信仰の道でもあった。

宿場は、北国街道に矢代宿・下戸倉宿・上戸倉宿、寂蒔に間の宿、北国西往還に稲荷山宿、桑原に間の宿が設けられた。谷街道には、雨宮宿が設けられたが伝馬の取次が主であった。

千曲川には、7か所の渡し場が設けられた。杭瀬下渡しは矢代宿と稲荷山宿とを結び、矢代渡しは北国街道の重要な渡し場であり、北国西往還とも結ばれていた。

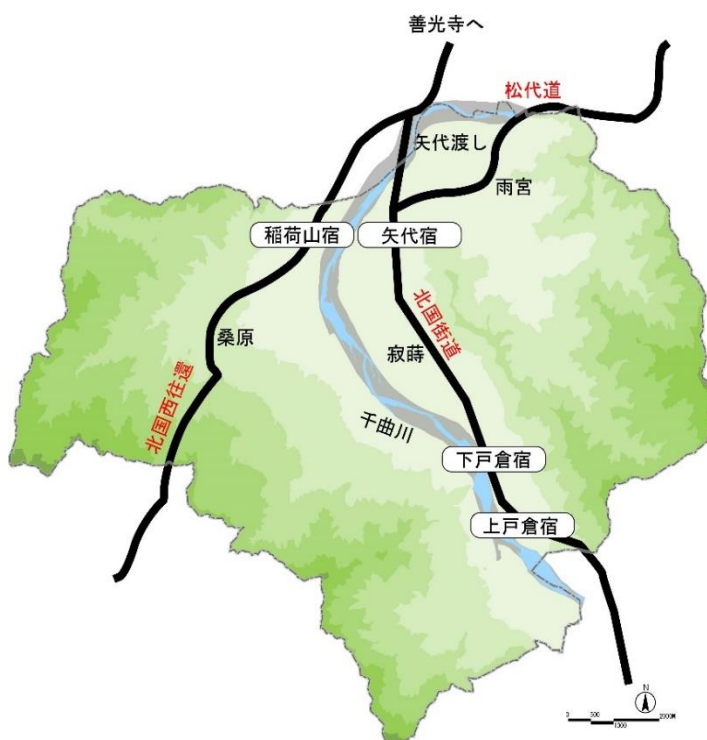


図 2-15 江戸時代の街道と宿場

[『更埴市史』]を参考に作成

③千曲川のはん濫と善光寺地震

千曲川のはん濫

江戸時代にも^{にんな}仁和4年(888)の「仁和の洪水」同様に、千曲川の洪水の記録が残されている。天文12年(1543)から明治8年(1875)までの約300年間にわたる記録によると、天文12年(1543)の洪水により舟山郷(屋代地区の粟佐を含む埴生地区一帯)が流失し、千曲川の河筋が大きく変化したとの記録や、寛保2年(1742)の「^{いぬ まんすい}戌の満水」と呼ばれる大洪水で、「矢代以南残らず浸水、死者1,220人など」と災害の様子が記録されている。

一方では、国役普請(幕府補助)や郡役普請(藩補助)、自普請(村負担)による堤防の修理や田畑の復興を行った記録も残る。また、千曲川の洪水により川筋が変わり、村境争論もしばしば記録に残っている。

このような千曲川のはん濫は、家財の流失、耕地の荒廃はもちろん、人畜の被害ばかりでなく不作、凶作をもたらして農民を苦しめ、修復に莫大な労力と経費を要したのである。

善光寺地震

弘化4年(1847年5月8日午後10時頃)、信濃から越後にかけて起こった大地震は「善光寺地震」と呼ばれ、日本の地震の記録の中では著名なものの一つである。その規模はマグニチュード7.4、震度7以上という大地震であった。

稻荷山宿は、千曲市域では最も大きな被害を受けたところである。その被害についての記録では、宿の大部分の家屋ほか建物が倒壊し、その後町内の4か所から出火して大火事となり、3日間燃え続け、町のほとんどが焼失してしまったと記されている。



写真 仁和の洪水砂層
[屋代地ノ目遺跡]

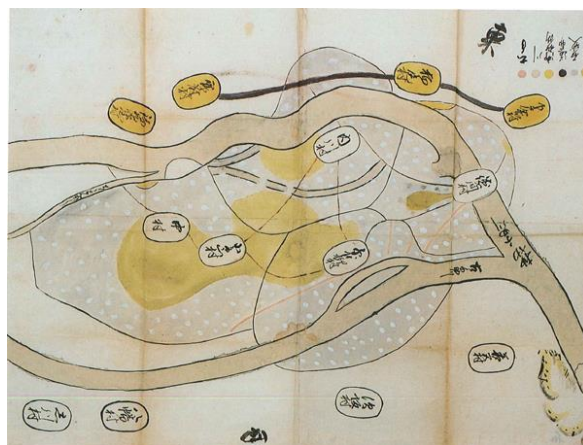


写真 寛保2年(1742)の戌の満水絵図
[『戸倉町誌』(村山家蔵)より]



写真 弘化の地震による稻荷山宿の火災被害図
[松林家蔵]

(5) 近・現代—鉄道と道路で発展—

①明治維新の新体制

慶応4年(1868)1月の鳥羽伏見の戦いから始まった^{ぼしんせんそう}戊辰戦争は、北信濃では飯山戦争(旧幕府軍と信濃諸藩兵の戦い)等を経て、明治4年(1871)7月に廃藩置県が断行された。松代藩は松代県となり、11月の府県制3府72県の再編により東北信6郡を管轄する長野県に編入された。さらに、明治9年(1876)8月には筑摩^{ちくま}県の中南信4郡を合わせて、旧信濃国10郡が「長野県」となった。明治22年(1889)の市制・町村制の施行で、現千曲市域では稲荷山町・屋代町ほか9村となった。次いで、明治24年(1891)施行の郡制により千曲川左岸地域の^{さらしなぐん}更級郡と、右岸地域の^{はにしなぐん}埴科郡に二分されることになった。

②綿から養蚕・製糸へ

換金作物として綿花が栽培され、その綿花や綿糸は稲荷山に集荷された。やがて、生糸の輸出に伴い養蚕・生糸製造へ転換し、稲荷山の繁栄の基となった。

明治14年(1881)稲荷山銀行が創業され、金融業も盛んとなり明治17年(1884)の県下の商業地等級では、一等の深志^{ふかし}(松本)・上田・長野、二等の小諸・飯田に次いで稲荷山は三等に、屋代は六等に位置付けられていた。

明治後半には養蚕が盛んとなり、千曲川の自然堤防上の屋代から雨宮一带の「屋代桑園」は、県下で有数の桑園地帯となっていた。また、風穴を利用した蚕種製造、埴生村の有明社・埴科社などの製糸工場での製糸業が発達した。

③鉄道の発展による街の変化

明治21年(1888)に信越線長野—上田間が開通し、屋代駅が開業した。明治26年(1893)には直江津—高崎間が全線開通した。明治24年(1891)には屋代駅と稲荷山を結ぶ道路が完成し、屋代駅周辺に運送・旅館・食堂・商店が立ち並びはじめ、昭和期に商業地の中心が屋代駅周辺に移っていく契機となった。

一方、明治33年(1900)塩尻—^{しののい}篠ノ井間を結ぶ篠ノ井線が開通し、給水や列車のすれ違いのために^{おぼすて}姨捨駅が設置された。稲荷山町では、町の衰退の懸念から住民の反対もあり、また技術上困難なこともあり、稲荷山駅は隣接の^{しおざき}塩崎地籍(長野市)に開設された。物資輸送が鉄道主体になり、これまで商業地として発展してきた稲荷山から、屋代駅や篠ノ井駅がその中継地となり、街の様相が大きく変わる事となった。

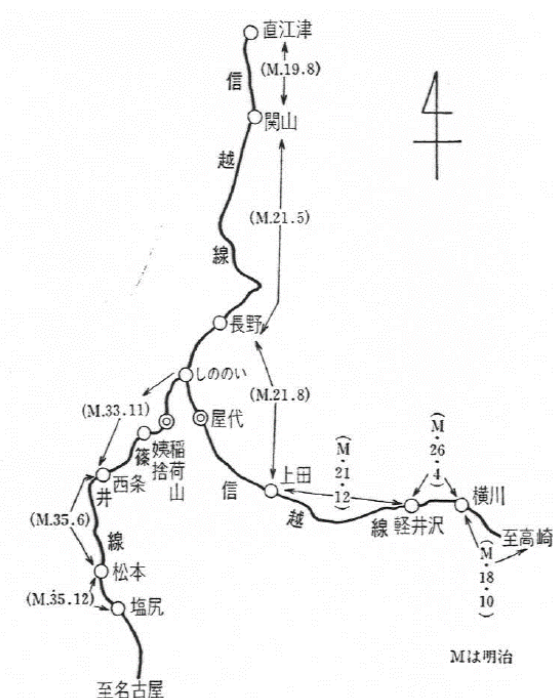


図 2-16 信越線・篠ノ井線開業年月略図

〔『更埴市史』〕

なお、戸倉駅の開業は、明治45年(1912)のことである。大正11年(1922)には、千曲川右岸の河東地域に河東鉄道の屋代―須坂間が開業した。

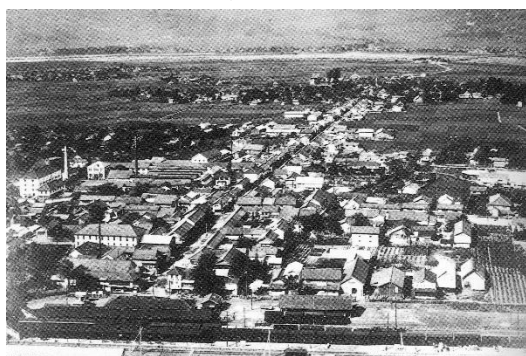


写真 昭和初期の屋代駅前



写真 明治33年10月25日 姨捨駅の開業

[『更埴市史』]

④戦後の町村合併

昭和20年(1945)第二次世界大戦の敗戦以降、社会状況の変化や自治体財政の窮迫から、町村合併が進められた。昭和28年(1953)には「町村合併促進法(昭和28年10月1日法律第258号)」が施行され、昭和29年(1954)10月1日に埴生町・杭瀬下村が合併し「埴生町」となった。昭和30年(1955)に屋代町・杭瀬下村・雨宮郷村・森村が合併し「埴科屋代町」となったが、6月1日に「屋代町」に名称変更を行い、翌年9月30日に倉科村を編入した。

同じく昭和30年(1955)、稲荷山町・桑原村が合併し「稲荷山桑原町」となり、12月1日「稲荷山町」と名称変更を行った。

戸倉上山田地区では、更級村・戸倉町が合併し、続いて7月1日に五加村・戸倉町が合併し「戸倉町」となった。また、上山田地区では力石村と上山田町が合併し「上山田町」となった。

昭和31年(1956)には、「新市町村建設促進法(昭和31年6月30日法律第164号)」が施行され、昭和34年6月1日埴科郡の屋代町・埴生町、更級郡の稲荷山町・八幡村が合併し、両郡名をとり「更埴市」が誕生した。

平成11年(1999)「市町村の合併の特例に関する法律(平成11年7月16日法律第26号)」に基づき、平成15年(2003)9月1日に更埴市・戸倉町・上山田町の1市2町が合併した「千曲市」が発足し、平成の合併としては県下最初の合併となった。

4 千曲市の文化財

千曲市内には、令和2年（2020）2月1日現在で合計149件（国指定等文化財45件、長野県指定文化財18件、千曲市指定文化財86件）の文化財が指定等されている。その分布は、市の中央部を北流する千曲川により二分された、左岸の川西地区に多くの文化財が所在しているのが本市の特徴である。

表 2-3 千曲市の指定文化財件数（令和2年2月1日現在）

指定区分	種別	件数	内訳
国	重要文化財	7	建造物2、彫刻2、古文書1、考古資料2
	重要無形民俗文化財	1	
	史跡	1	
	名勝	1	
	特別天然記念物	1	
	重要文化的景観	1	
	重要伝統的建造物群保存地区	1	
	登録有形文化財	31	建築物25、工作物2、土木構造物4
	記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財	1	
	小計	45	
県	県宝	15	建造物1、彫刻5、工芸品1、歴史資料2、考古資料5、古文書1
	史跡	2	
	天然記念物	1	
	小計	18	
市	有形文化財	46	建造物4、石造物4、彫刻15、工芸品2、古文書8、考古資料8、歴史資料5
	無形文化財	1	
	無形民俗文化財	3	
	史跡	15	城館跡4、古墳9、井戸跡1、古道1
	名勝	4	
	天然記念物	17	
	小計	86	
合計		149	

(1) 国指定等文化財

国指定等文化財は、古くは史跡の古墳時代の古墳から、重要文化財の平安時代の仏像や社寺建築、重要無形民俗文化財の民俗芸能、名勝と重要文化的景観の姨捨の棚田、重要伝統的建造物保存地区など多岐にわたっている。

建造物では、室町時代の禅宗様式の寺院建築の智識寺大御堂と、江戸時代に大隅流の宮大工柴宮長左衛門によって建てられた多彩な彫刻で飾られた「水上布奈山神社本殿」（戸倉地区）がある。



写真 智識寺 大御堂

重要文化財の彫刻では、平安時代の像高3mにおよぶ木造十一面観音立像（上山田地区 智識寺）と、鎌倉時代の作風にならった江戸時代の秀作とされる木造愛染明王坐像（稲荷山地区 長雲寺）がある。

ほかに、長野県立歴史館に所蔵されている重要文化財には、「日向林 B 遺跡出土品」の石器群（旧石器時代、信濃町）や、「吉田川西遺跡土壙出土品」の土器群（平安時代、松本市）、平安時代の古文書「鳥羽院序下文」などもある。

重要無形民俗文化財の「雨宮の神事芸能」は、「雨宮の御神事」「獅子踊り」とも呼ばれる、雨宮坐日吉神社の祈年祭に行われる豊作祈願の神事芸能である。以前は屋代・森・倉科・生萱・土口の旧5か村でも行われていたが、現在は雨宮地区だけで3年ごとの4月29日に行われている。千曲川支流の沢山川に架かる齋場橋から、4頭の獅子が逆さづりとなる「橋懸り」は、祭りの最大の見せ場となっている。

また、千曲川左岸の八幡・更級・五加地区には、記録選択の無形の民俗文化財の「武水別神社の頭人行事」が毎年欠かすことなく400年も継続されている。「大頭祭」「おねり」とも呼ばれる新嘗祭の行事である。

史跡の「埴科古墳群 森將軍塚古墳」は、昭和40年代に発掘調査が行われ、長大な竪穴式石室を設けた全長約100mの前方後円墳であることが明らかになった。また周辺での埋め立て用土砂採取により崩壊するところを市民・研究者・行政が一体となった保存運動によって守られ、昭和46年（1971）に国の史跡として保存された経緯をもつ。昭和56年（1981）から平成3年（1991）にかけて全面的な発掘調査が行われ、古墳築造当時の姿に復原整備された。

名勝の「姨捨（田毎の月）」は、農耕地が国の文化財に指定された最初の棚田である。重要文化的景観に選択された「姨捨の棚田」は、名勝指定地を含めた64.3haの範囲で、聖山高原を背に善光寺平を一望する標高460～560mほどの傾斜面に面積約40ha、約1,500枚の棚田が耕作されている。



写真 重要文化財
「長雲寺木造愛染明王」

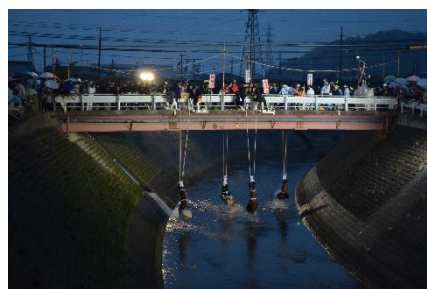


写真 重要無形民俗文化財
「雨宮の神事芸能」橋懸り



写真 史跡「埴科古墳群
森將軍塚古墳」



写真 名勝「姨捨（田毎の月）」
重要文化的景観「姨捨の棚田」

姨捨は、古く平安時代から文学・絵画などの題材に取り上げられ、文学・歴史的な景観を形成している。^{おぼいし}姨石や松尾芭蕉の句碑などが残る長楽寺を展望地点として、そこから望まれる^{しじゅうはちまいだ}四十八枚田と、姨石を展望地点としてそこから望むことの可能な約6haの棚田が名勝に指定され、保存が図られている。

重要伝統的建造物群保存地区に選定された「千曲市稲荷山伝統的建造物群保存地区」は、天正期に成立し、江戸時代には宿場町として機能しつつ、19世紀初期以降商業地として発展した商家町で、江戸時代以来の地割を良く残すとともに、江戸時代末期から昭和戦前にかけて建てられた特色ある伝統的建造物を良く残し、我が国にとって価値が高いものである。

登録有形文化財には、建造物の「笹屋ホテル別荘」「坂井銘醸主屋や蔵」「長野銘醸酒蔵等」「寿高原食品四階倉庫」「瀧澤家住宅」、土木構造物の「^{りゅうとういん}龍洞院架道橋」「^{たきざわがわ}滝沢川橋梁」「^{いざわがわいしえんてい}荏沢川石堰提」がある。

笹屋ホテル別荘は昭和7年（1932）、戸倉上山田温泉に建てられた旅館建築で、建築家遠藤新の設計による木造和風旅館建築である。畳敷きの座敷と一段下げた椅子置き^{いす置き}の広縁から庭に至る客室構成は、後の観光旅館に大きな影響を与えた。現在「豊年虫」と名付けられ、戸倉上山田温泉のホテル客室として使われている。

坂井銘醸主屋や蔵は、北国街道沿いの^{しもとぐら}下戸倉宿（戸倉地区）にある。基本構造を残しながら内部を改修・改装して、事務所・店舗として使われおり、外観的には茅葺屋根、曲屋、式台等には江戸時代中期建築の面影を良く残している。

長野銘醸酒蔵等は、善光寺街道沿いの^{くわばらしゆく}桑原宿外れの^{なかはら}中原（八幡地区）に元禄2年（1689）創業とする和田酒店を前身とした酒造所である。現在、約58,000㎡の敷地に、江戸末期に建てられた土蔵造り2階建て約530㎡の酒蔵をはじめ、貯蔵蔵、米蔵、粕蔵のほか、大正5年（1916）に建てられた事務所などの建物があり、今も酒造りが行われている。



写真 重要伝統的建造物群保存地区
「千曲市稲荷山」



写真 登録有形文化財
「笹屋ホテル別荘」客室



写真 登録有形文化財
「坂井銘醸主屋や蔵」



写真 登録有形文化財
「長野銘醸酒蔵ほか」

第1章 歴史的風致の背景

ことぶきこうげんしょくひんよんかいそうこ
寿 高原食品四階倉庫は、しなの鉄道戸倉駅前に建つ木造4階建、切妻造、瓦葺の倉庫である。大正4年（1915）、戸倉倉庫株式会社によって建てられたもので、一定の間隔で多数の窓を配置した外観は、まゆ繭倉庫の建築を引き継いだものと考えられる。明治45年（1912）に戸倉駅が開業した直後で、鉄道を利用した物資の輸送にはこうした倉庫が必要であったとみられる。現在、寿高原食品株式会社の倉庫として使われている。

たきざわけじゅうたく
瀧澤家住宅は、磯部地区に所在する。瀧澤家は、江戸時代に現在の場所に居を構え、組頭などを務めてきた。主屋と土蔵は、江戸時代中期、長屋門は江戸時代後期の建築であり、萱葺きの外観と屋敷構えが良好に残る建物群である。

稲荷山・桑原地区にあるりゅうとういんかどうきょう たきざわがわきょうりょう龍洞院架道橋・滝沢川橋 梁は、ともに明治33年（1900）に鉄道篠ノ井線開通に合わせて建設された鉄道施設で、石積みと煉瓦積みによるアーチ構造をした橋である。

桑原地区の佐野川支流のいざわ いしえんてい荇沢川に設けられた石堰堤は、明治15年（1882）から17年（1884）にかけて内務省の直轄事業で築かれた、我が国初期の砂防施設の一つである。



写真 龍洞院架道橋

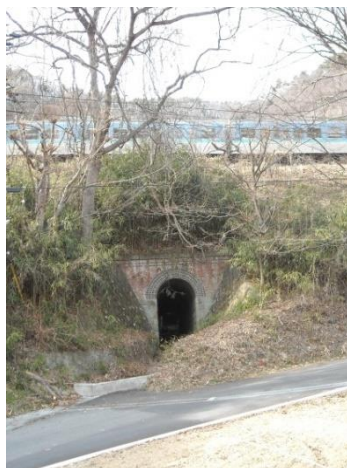


写真 滝沢川橋梁

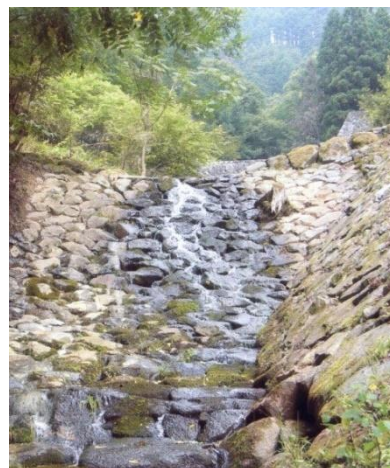


写真 荇沢川石堰堤



写真 寿高原食品四階倉庫



写真 瀧澤家住宅

(2) 長野県指定文化財

長野県指定文化財のうち、有形文化財を「長野県宝」という名称で指定している。

県指定では、県宝指定の仏像や建造物、考古資料のほかに、県史跡の中世の^{やかたあと}館跡や城跡、県天然記念物の武水別神社の^{しゃそう}社叢など18件がある。

建造物の^{たけみずわけじんじや}武水別神社の「^{かみりゆうじ}摂社高良社本殿」は、同神社に残る一番古い建物で、室町時代に建てられたものである。

彫刻は5件あり、うち3件は^{かんりゆうじ}観龍寺（森地区）に納められている。平安時代の「木造千手観音坐像」「木造十一面観音立像」「木造聖観音菩薩立像」（平成10年<1998>盗難）があるほかに、戸倉地区に仏像2件がある。

工芸品では、^{たけみずわけじんじや}武水別神社（八幡地区）に嘉吉3年（1443）銘の^{どうせいいつりどうろう}銅製釣燈籠がある。考古資料では、更級地区若宮の^{やつか}箭塚遺跡から見つかったとされる弥生時代の「細形銅剣」がある。

ほかに、長野県立歴史館に所蔵されている県宝には、考古資料で旧石器時代の石器「下茂内遺跡出土品」（佐久市）、縄文時代の土器「動物装飾付釣手土器」（富士見町^{はらいざわ}弘沢遺跡）、奈良時代の「屋代遺跡群出土木簡^{もつかん}」（屋代地区）、平安時代の「^{しゃぐうじ}社宮司遺跡出土木造六角宝幢^{ろっかくほうとう}」（八幡地区）がある。古文書・歴史資料では、室町時代の「絹本墨書^{だいもんじ}大文字の旗」、近世の「清水家文書」、近代の行政資料の「長野県行政文書」がある。

史跡名勝天然記念物の県史跡には、戦国時代の「武水別神社神主松田家館跡」があり、県天然記念物として「武水別神社社叢」がある。

「武水別神社神主松田家館跡」は、周囲に土塁や堀を巡らせた東西約70m、南北約90mの方形の屋敷地である。現在も西側と南北の一部に土塁が残り、東側には堀も確認できる。戦国時代の館の姿をよくとどめている。

武水別神社社叢は、大きなケヤキを中心に約25種、400本の木が茂り、境内を荘厳な雰囲気にしてている。



写真 県宝「^{かみりゆうじ}摂社高良社本殿」



写真 県宝「^{かんりゆうじ}観龍寺木造千手観音坐像」



写真 県宝「^{しゃぐうじ}社宮司遺跡出土六角宝幢」
[長野県立歴史館]

(3) 千曲市指定文化財

千曲市指定文化財は86件で、その内訳は有形文化財の彫刻15件、建造物4件、考古資料8件、歴史資料5件、石造物4件、古文書8件、美術工芸品2件、無形文化財1件、無形民俗文化財3件、史跡名勝天然記念物が36件ある。

有形文化財の建造物の「屋代小学校旧本館」(屋代地区)は、明治5年(1872)の学制に基づき、明治21年(1888)に建築された学校である。当時、地元の大工たちが見よう見真似で建てた洋風建築で、「擬洋風建築」^{ぎようふうけんちく}と呼ばれている。明治の文明開化の時代を象徴する、県下で数少ない明治期の学校建築である。



写真 屋代小学校旧本館

戦国時代の古文書の「屋代家文書ほか一括」は、戦乱の中で在地の豪族屋代氏が、武田信玄・上杉謙信・徳川家康と領主を替えて生きのびた様子を物語るものである。

考古資料には、平安時代後期の「五輪堂遺跡第2号火葬墓出土遺物」(屋代地区)や、「経筒」(戸倉地区^{きやうがみね} 経ヶ峰経塚出土)がある。県宝「社宮司遺跡出土木造六角宝幢」や、未指定の経塚なども数多くあり、この地に仏教文化が、浸透していたことがわかる。

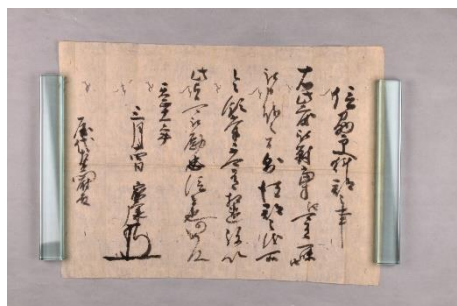


写真 屋代家文書

市指定の民俗芸能・風俗慣習には、「上山田大々御神楽」(上山田地区)、「水上布奈山神社の御柱祭」(戸倉地区)、「稻荷山祇園祭」(稻荷山地区)、「大池の百八灯」(大池地区)があり、各地区等で保存会を作り地域の伝統行事の継承に努めている。



写真 稻荷山祇園祭

市指定史跡の「屋代城跡」(屋代地区)、「荒砥城跡」^{あらと}、「入山城跡」(上山田地区)は、屋代氏などが活躍した山城である。

市指定天然記念物の「中原のリンゴ国光原木」(八幡地区)は、明治初めにリンゴの苗木が輸入され、中原の和田郡平が増殖した1本で、県下最古のリンゴの樹である。また、「セツブンソウ群生地」は、戸倉地区と倉科地区の2か所に群生しており、2月から3月に春一番を告げる白い小さな花が咲く。本市では、市花に定めて保護を図っている。



写真 中原のリンゴ

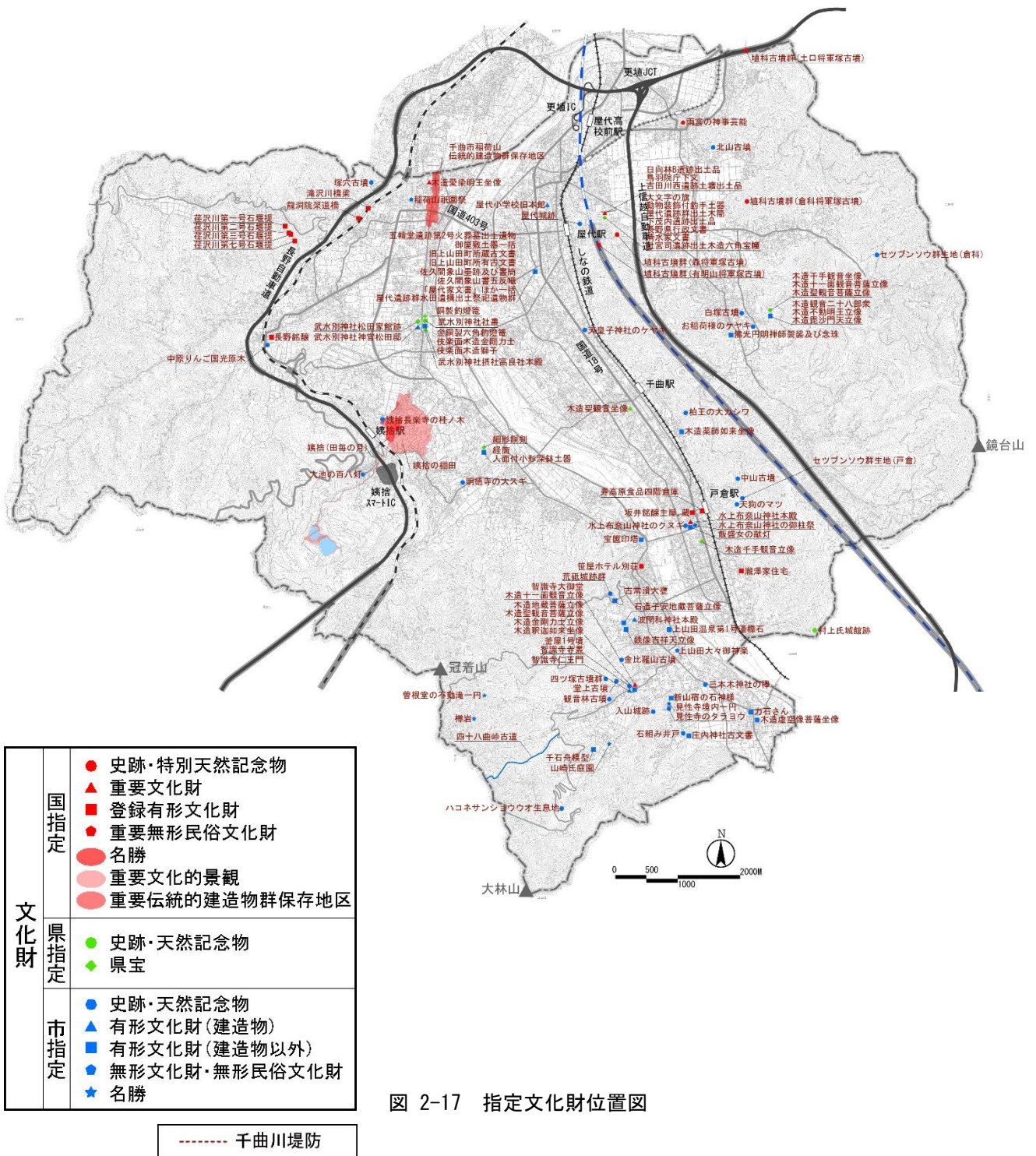


図 2-17 指定文化財位置図

(4) 埋蔵文化財

千曲市内には、周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が540遺跡確認されている。そのほとんどの遺跡は、千曲川の沖積地の自然堤防上や、その後背湿地帯に集中している。氾濫原においては、流失または地表深く埋没しているため確認ができない遺跡もあると推察される。自然堤防上では、弥生時代～中世の遺跡が重複しており、千曲川の洪水により何度も埋没と復興を繰り返したものとみられる。

一方、山裾や扇状地上には、縄文時代～平安時代の集落遺跡が広がっている。また、山裾部には、古墳時代後期の小古墳群が点在している。沖積地に突き出した尾根上には、前期～中期の古墳や、戦国時代の山城が築かれている。

さらに、山間部には、旧石器時代～縄文時代の拠点的な遺跡が点在している。

上信越自動車道建設に伴う発掘調査において、屋代地区の地表下4mから縄文時代前期～後期の集落遺跡が発見されたことは、発見以前の本市域の縄文時代の遺跡分布や、縄文時代の様相を一変させる大きな発見となった。

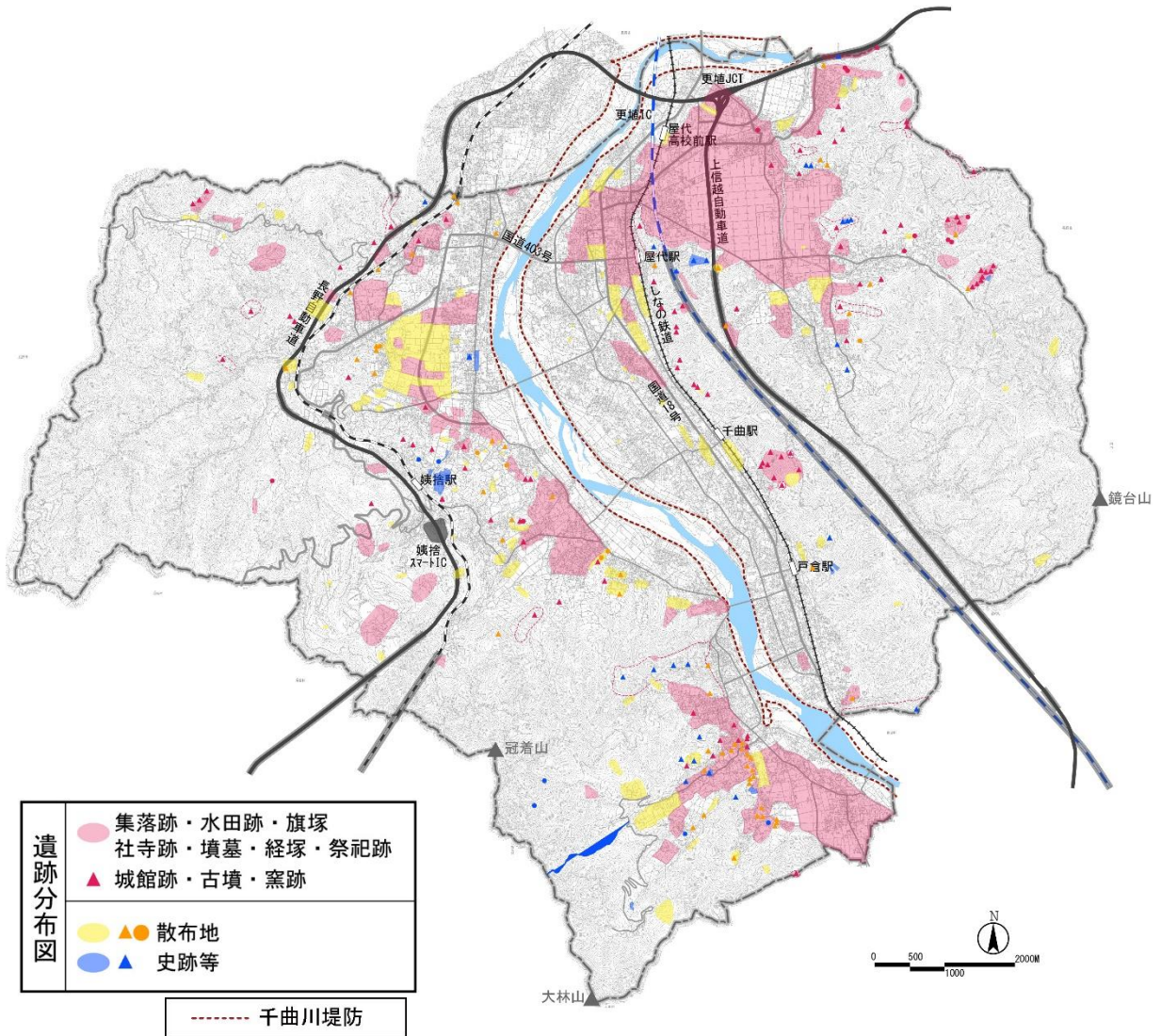


図 2-18 埋蔵文化財包蔵地分布図

(5) 指定文化財以外の文化財・歴史的遺産

①歴史的価値の高い建造物

JR篠ノ井線^{おぼすてえきしや}姨捨駅舎

篠ノ井線は、明治33年（1900）に篠ノ井駅～西条駅間が開通し、駅舎も同時開業した。現在の駅舎は、昭和9年（1934）建築で、木造平屋建、寄棟造、スレート葺で、棟を十文字に交差させ、前後の破風は寄棟造りの屋根を切り下げた袴腰屋根にしている。全体的に、大正・昭和初期の大正モダニズムの雰囲気をよく残した歴史的な建造物である。

日本経済新聞の「訪ねる価値のある駅」ランキングで、福岡県門司港駅に次ぐ、第2位の駅舎とされた。



写真 姨捨駅舎

カ石^{ちからいし}の養蚕民家群

カ石集落（上山田地区）には、幕末から明治期に建てられた養蚕民家が20棟ほどあり、この地区で養蚕が盛んであったことを伝えている。特に、この地区では、蚕種^{さんしゆ}生産が主に行われていた。明治42年（1909）蚕種の全国比49.4%と、本県はその半数を生産していた。

佐良志奈^{さらしな}神社本殿

佐良志奈神社は、武水別神社と関係の深い神社であり、更級郡域における延喜式内社の一つである。本殿は三間社流造で、江戸時代後期の建築と伝わる。

大正橋の西詰、八王子山の麓に位置し、神社の社叢は戸倉上山田の温泉街や更級地区に向かうランドマークとなっている。

寂蒔^{じゃくまく}の水除土堤^{みずよけどて}

この土堤は、千曲川の氾濫から田畑や家屋を守るために、元禄6年（1693）に、寂蒔^{じゃくまく}・^{いもじや}・^{うっさわ}・^{おじま} 鋳物師屋・打沢・小島の四か村によって築かれた。北国街道と土堤が交差するところは、非常時には土のうや石で道の部分を埋めて、ひと続きの土堤として水害を防いだものである。村民の水害に対する苦労と工夫がしのばれる歴史的遺産である。



写真 カ石の養蚕民家



写真 佐良志奈神社



写真 寂蒔の水除土堤

②歴史的価値の高い近代化遺産

森の風穴^{ふうけつ}

森地区にある風穴は、明治45年（1912）に蚕種の貯蔵用に造られたもので、現在は石を積み上げた壁体のみが残っている。風穴を利用して蚕卵を冷蔵保存し、ふ化や出荷時期の調整が行われた。当時、蚕種製造が盛んで、こうした風穴が各地に造られて利用された。生糸貿易による近代化を支えた近代化遺産として貴重な存在である。



写真 森の風穴

③歴史的価値の高い遺跡・有形文化財

円光房遺跡出土の土器群^{えんこうぼう}

更級地区にある円光房遺跡は、縄文時代後・晩期の集落遺跡で、圃場整備に伴い発掘調査が行われた。

この遺跡から、東北地方の影響を受けた縄文時代晩期の土器群が出土している。また同後期の敷石住居や立石址、配石墓なども見つかり、縄文時代後・晩期の墓制を知るうえで重要な遺跡である。



写真 円光房遺跡出土の土器群

屋代寺の瓦窯^{おくだいじ}

森地区の南殿入古窯址から屋代寺（雨宮廃寺）に使われた瓦片が多数発見されている。現地調査の結果、瓦窯の存在が推定された。本市内には、奈良時代の定額寺である屋代寺をはじめ、埴科郡衙（初期国衙、屋代遺跡群、雨宮地区）と更級郡衙（八幡遺跡群、八幡地区）の存在が推定されており、本遺跡はそれに関連する重要な遺跡である。



写真 屋代遺跡群

長楽寺 聖観音菩薩立像^{ちょうらくじしょうかんのんぼさつりゅうぞう}

姨捨地区にある名勝「姨捨（田毎の月）」指定地内にある長楽寺には、秘仏として聖観音菩薩像が観音堂に安置されている。本像は、室町時代の善導大師の作と伝えられている。平成27年（2015）4月5日から5月31日には、7年に一度の御開帳として公開された。



写真 長楽寺観音堂

はね お おおぎだい
羽尾扇 平出土の密教法具

更級地区羽尾の冠着山山腹の扇平地籍より、林道工事の際に平安時代末期の密教法具が発見されている。金剛鈴1点、火舎香炉1点、花瓶2点、六器6点である。これらは経塚に埋納されたものと推定されるが、平安末期の末法思想と経塚、密教・修験との関係、冠着山を廻る歴史的な資料群である。



写真 扇平出土 密教法具

こさか
稲荷山城跡・小坂城跡

稲荷山城は、天正10年(1582)上杉景勝によって築かれたことが知られているが、城の構造や縄張りについてはわかっていない。また、稲荷山の西側にある篠山の尾根上に小坂城が築かれている。

戦国時代の様相を明らかにするために、早急な調査が望まれる重要な遺跡である。



写真 稲荷山城跡

れいじょうざん
霊諍山の石仏群

八幡と桑原地区の境にある霊諍山には、明治になって、修験系の講社が開かれ信者を集めた。特に、養蚕が盛んになった頃であるので、猫神などの石仏が多数奉納され、今も残されている。民間信仰と世相が相まって、ユニークな歴史的遺産である。



写真 霊諍山の石仏群

④歴史的価値の高い民俗芸能・伝統行事

たけみずわけじんじゃ
武水別神社のお田植え神事

武水別神社では、毎年1月5日に「お田植え神事」を行っている。この冬のお田植えは、餅で作った鎌や鍬と、松葉で神官らが田植えの仕草をし、それを見ている住民らが囃し立てるというユーモラスな神事で、新たな年の豊作を祈願するものである。



写真 武水別神社のお田植え神事

5 千曲市の歴史に係る主な人物

たてべのおおがき

建部大垣 詳細不詳（奈良時代）

善行者

『続日本紀』神護景雲2年（768）5月の条に「信濃国更級郡人建部大垣 為人恭順 事親有孝・・・免其田終身」とあり、信濃国更級郡の建部大垣は、親孝行として律令政府から表彰され、税を終身免除された。最も古い記録に残る更級郡の人。

ごんのしょうそうぜじょうしゆん

権少僧都成俊 詳細不詳（南北朝時代）僧侶・万葉集研究家

南北朝の騒乱を避け、更級郷に閑居して一人『万葉集』の研究を行った三井寺（滋賀県）の僧侶。成俊の業績は、仙覚校訂の『万葉集』全20巻を後世に伝えたこと、日本で初めて歴史的仮名遣いによって『万葉集』の読みを付けたことである。なお、成俊に『万葉集』全20巻を与えたのは、更級郷に隠居していた宗良親王と推定されている。

現在、姨捨の長楽寺境内に業績を称えた石碑がある。



やしろまさくに

屋代政国 永正17年（1520）～永禄4年（1561） 武将

政国は、天文22年（1553）屋代城から荒砥城に拠点を移して武田氏の武将として活躍し、永禄4年（1561）の川中島の合戦で討死した。嫡子正長も天正3年（1575）長篠の合戦で討死し、父子二代にわたって戦陣に倒れた。こうした記録が、「屋代家文書」として残されている。

まつだおりべのすけ

松田織部 祐 詳細不詳（戦国時代）

武将・神官

元は仁科姓、実名は盛直。天正12年（1584）に上杉景勝から、「松田分并八幡領一円預置」を得て、松田名跡を継承し更級八幡宮別当となり、慶長3年（1598）松田縫殿助に神主職を預け置き、上杉景勝の会津移封に同道する。

以降、武水別神社神主職が継承される。

みやもと こじょう

宮本虎杖 寛保元年（1741）～明治7年（1874） 俳句宗匠

下戸倉宿に生まれ本名を道孟、通名を清吉、また八郎兵衛とも称した。明和5年（1768）28歳の時に、来信した俳諧の加舎白雄に師事、明和8年（1771）には白雄に従って、1年有余北陸、京阪、紀伊、伊勢と巡り薫陶を受け、さらに江戸に出て「春秋庵」に学ぶ。天明4年（1784）秋には判者（宗匠）の許しを受け「虎杖庵」を称している。白雄没後は、同門4千余の長老として春秋庵一派の拡大に尽した。また虎杖は、北東信に門人四百余を擁した。『つきよほとけ』『いぬ榎集』『豆から日記』などを刊行。



かきざきた ぜん

柿崎多膳 寛政4年(1792)～元治元年(1864) 医師・郷土史家

天保7年(1836)に矢代村に医師として移り住み、医業のかたわら読み書き・謡曲等の教授を行った。安政6年(1859)に『屋代記』を著し、神明宮・山王社(須須岐水神社)などの屋代郷五社並びに屋代寺・法華寺等の寺社をはじめ、天変地変の災害の記録ほか、周辺村々の歴史上のことなども克明に記している。

おおたにこうぞう

大谷幸蔵 文政8年(1825)～明治20年(1887) 実業家

羽尾村の代々名主を務める大谷家に生まれ、蚕種貿易を行い、大きな利益を上げた。また、松代藩に坐繰製糸を奨励し、生糸の販売も行った。イタリアなどに数回渡航し、世界的商人として活躍した。



こだいらじん えもん

小平甚右衛門 天保14年(1843)～明治4年(1871) 義人

松代藩は、太政官札の流通に向け、藩札の回収を行うことになった。その交換率が低く、農民の生活は苦境におちいり、明治3年(1870)11月25日、上山田村の農民たちが行った一揆「午札騒動」(松代騒動)の責任を一身に負い、斬罪となった義人である。郷土の義人として、顕彰碑が建てられている。



わだぐんべい

和田郡平 天保14年(1843)～明治44年(1911) 実業家

江戸時代から続く、八幡村中原の酒店に生まれた。明治の初めに、アメリカから輸入されたたしたリンゴの苗木を仕入れ栽培を行い、現在の県下のリンゴ栽培の礎を切り拓いた。この時の1本が現存し、今も実をつけている。明治14年(1881)には、小出八郎右衛門らと稲荷山銀行を設立した。稲荷山銀行は、後に六十三銀行となり、現在の八十二銀行に続くものである。



つかだ こ えもん

塚田小右衛門 嘉永元年(1848)～大正11年(1922) 政治家

羽尾村の名主の家生まれ、更級村初代村長・県議会議員などを歴任し「雅丈」と号した。明治22年(1889)4月1日の若宮村・須坂村・羽尾村の合併にあたり、新村名を「更級村」と強く提唱した。また、冠着山が姨捨山であるとの強い思いから、新聞紙上に考証を発表し、私財を投じてその啓蒙に努めた。

さかいらょうのすけ

坂井量之助 安政6年(1859)～明治38年(1905) 実業家・政治家

下戸倉宿で、酒造業を営む坂井家の次男として生まれた。県議会議員に選ばれて以降、戸倉村長なども歴任した。明治23年(1890)からは、温泉開発に乗り出し、莫大な費用と労力を費やし、明治26年(1893)戸倉温泉開湯に至った。その後、いく度か千曲川の洪水に見舞われたが、上山田温泉も開湯した。戸倉駅誘致にも尽力し、戸倉駅は明治45年(1912)に開業した。



にいむらただお

新村忠雄 明治20年(1887)～明治44年(1911) 社会主義者

屋代町の農家に生まれ、幸徳秋水ら社会主義に傾倒し、明治43年(1910)に起こった大逆事件により処刑された12名のうちの一人。当時、日露戦争による国民生活の悲惨な状況から、社会主義への関心が高まっていた。現在、事件は冤罪として、新村の復権が叫ばれている。



こんどうひでぞう

近藤日出造 明治41年(1908)～昭和46年(1971) 漫画家

稲荷山に生まれ、本名は秀蔵。漫画家を目指して上京し、岡本一平の弟子となり、昭和8年(1933)読売新聞社に入社し、新聞に風刺漫画を描く。政治家の似顔絵を主とする政治風刺漫画を中心に描いた。昭和39年(1964)日本漫画家協会を設立し、初代理事長になる。

平成2年(1990)稲荷山に「ふる里漫画館」が開館され、日出造の作品が収蔵・展示されている。

こだまこうた

児玉幸多 明治42年(1909)～平成19年(2007) 文学博士

稲荷山治田神社の神主家に生まれ、東京帝国大学文学部国史学科を卒業。近世の「農村」や「交通史」を研究し、『江戸時代の農民生活』や、『近世交通史の研究』などを発表。昭和48年(1973)学習院大学学長、平成5年(1993)江戸東京博物館初代館長などを歴任。『更埴市史』監修。

なかじょうたかのり

中條高德 昭和2年(1927)～平成26年(2014) 実業家

森村の農家に生まれ、軍人を目指し陸軍士官学校に進むが終戦となり、戦後アサヒビールに入社。昭和57年(1982)営業本部長として「アサヒスーパードライ」作戦を指揮し、同社を業界トップへ躍進させ、副社長・会長を歴任。

地元千曲市の子どもたちへ毎年図書を贈り続け、市内小中学校図書館には「中條文庫」が設けられるなど、青少年の教育にも尽力した。



もりしま
森嶋 みのる**稔** 昭和6年(1931)～平成8年(1996) 教育者・考古学者

戸倉町に生まれ、小学校教諭のかたわら「千曲川水系古代文化研究所」を主宰し、遺跡の調査や県・市町村の文化財保護の指導、助言を行う。昭和37年(1962)長野県考古学会設立発起人に名を連ね、事務局長・会長を歴任。著書に、『更級埴科地方誌』『更埴市史』『戸倉町誌』など多数。



6 千曲市の食文化

千曲市域では、二毛作が行われ裏作には小麦が主に作られてきた。昭和40年代半ばまでは主食に、うどんやおやきが多く食べられていた。特に、本市の降雨量の少ないことが小麦栽培に適しており、盛んに栽培されていた。「更科蕎麦」の起源ともいわれるように蕎麦の栽培も行われていたが、明治以降は多くは栽培されず、近年になって転作作物の一つとして栽培されるようになってきた。

おしぼりうどん

地大根（在来種の大根）をすりおろし搾った辛い汁に、味噌を溶かして釜揚げうどんを食べるもので、大根の採れる秋から冬のうどんの食べ方である。近年では、「おしぼりそば」も食べられるようになり、大根は冷蔵保存されて一年中食べられるようになった。



写真 おしぼりうどん

おとうじ

冷麦または素麺を茹でて、ひとかい（一碗分に丸めておく）ずつザルや半切りに並べておき、ちくわや野菜が入った醤油出汁を作っておく。茹でた麺をお湯にとうじて（湯でほぐして温める）、野菜の入った汁をかけて食べるものである。

おとうじは、葬式や祭りなど、大勢人が集まる時に振る舞われるものである。武水別神社の大頭祭では、必ずおとうじが作られ、祭り関係者だけでなく、見物人などだれにでも振る舞われる。最近では、「おとうじそば」と称して、そばもこうした方法で食べるようになった。



写真 振る舞われるおとうじ

干しあんずのしそ巻

干しあんずのしそ巻は各家庭で作られ、お茶とともに食される、あんず産地ならではの漬物の一つである。

在来種のおあんず（実の直径3cmほど、干して加工して食べる。主に杏仁の種を取った）は、千曲市域のどこの家でも屋敷の隅や畑の端に、1～2本植えられている。現在は伐採されて数が少なくなったが、花の色が濃くきれいなあんずである。6月下旬から7月上旬、あんずが熟し落下したものを二つ割りにして種を取り出し、天日で良く干す。干したあんずを一つずつその葉に包み、砂糖漬けにする。



写真 しそ巻あんず

川魚（ハヤのつけば）

千曲川のハヤの産卵期（4月下旬～6月下旬）に、川原に設けた季節的なつけ場小屋で、つけ場漁で捕ったハヤ（アカウオ）を塩焼き・天ぷら・から揚げ等にして食べる。千曲川の初夏の風物詩として、県内外にもよく知られている。つけ場小屋は、漁のための寝泊り専門で、外部から客を招くようなことはほとんどなかったが、昭和15年（1940）頃から小屋で料理を出し飲食するようになった。

つけ場漁は、佐久市から長野市の犀川との合流点付近の間で行われ、産卵のために小石に集まる習性（産卵場所を「つけ場」と呼ぶ）を利用して漁をするもので、マヤ・割り川・上げ川の三つの漁法がある。

ほかに、鯉こくや鯉の洗いがよく食べられる。鯉は、脂ののった冬場、特に歳とりや正月料理としてこの地域では食べられている。



写真 ハヤの塩焼き



写真 鯉こく



写真 鯉の洗い